

## 2025(令和7)年度 白鷗大学大学院法学研究科

### 修士課程入学試験問題

#### (政治学)

I. 権力、政治的リーダーシップに関する次の記述のうち、妥当なものはどれか。(10点)

① R.ダールは、「AがBに対して、Bが本来やりたくない何かをさせることができる時、AはBに対して権力を有する」とし、権力に関して権力を行使する者の存在だけでなく、その権力に服従する者の反応を重視し、権力を双方の関係からとらえた。彼は、このような考え方を、権力の零和概念と名付けた。

② M.フーコーは、自ら考案した「パノプティコン(一望監視装置)」という集団監視施設を例に挙げ、規律権力は、監視と指導を通じて人々に正しい行為の規範を内面化させ、自発的に規律正しい振る舞いができる人間を作ることを目指すものであるとした。彼は、このように、権力をその行使者と服従者との二者間関係として明確にとらえることを重要視した。

③ 政治的リーダーに求められる資質に関して、プラトンは、政治の目標である「善のアイデア」を認識し、政治の技能として「高貴な嘘」を駆使できる哲人王が政治的リーダーになるべきだとし、N.マキアヴェッリは、国民を十分に操作し得る「狐の知恵」と国民を畏服させ得る「ライオンの見せかけ」とを備えた君主が国家の政治に当たる必要性を説いた。

④ R.シュミットは、政治的リーダーシップを、創造的リーダーシップと代表的リーダーシップに区分した。そのうち創造的リーダーシップは危機的状況に際してこれまでの価値体系そのものの変革を図ることによりリーダーシップを獲得するものであり、代表的リーダーシップは大衆の不满を一挙に充足させる解決方法を提示するものであり、全く矛盾する公約の濫発やスケープゴートの創出等を行うことによりリーダーシップを獲得するものである。

⑤ 権力の実体概念とは、権力を人間又は人間集団が保有する何らかの力としてとらえる考え方であり、この立場の代表者として、暴力(軍隊)の集中を権力の基盤とみなした N.マキアヴェッリ、富(生産手段)の所有が権力の基盤であるとした K.マルクスなどが挙げられる。他方、富や技能や知識等の権力の基盤は多様であるとした H.D.ラズウェルは、権力の実体概念を否定し、権力の関係概念を提唱した。

II. 民族や地域とアイデンティティに関するア～エの記述のうち、妥当なもののみを全て挙げているのはどれか。①～⑤のなかから選べ。(10点)

ア フランスとスペインにまたがるバスク地方においては、フランス側とスペイン側とで帰属意識に対する考え方は異なっているとされる。フランス側では、バスク地方で生まれたという事実を重視するのに対し、スペイン側では、バスク人になりたいという意思を重視する。このように、後発的な事情を重視することにより、スペイン側のバスク地方においては、移民や移民の子孫が帰属意識を共有することが困難となっている。

イ 前近代のイスラム世界においては、政治の領域から宗教を排除し言語の共有を核とした文化的に均質な民族が主権国家を持つ権利を有するという思想に基づく、いわゆる国民国家を単位とする政治体制は確立しておらず、統治単位として宗教や宗派単位が重視されていたため、一定領域内において多民族の共存を可能とする政治体制をとることができたと考えられている。

ウ 19世紀前半にオランダから独立したベルギーでは、政治、経済、文化を主導したのは首都ブリュッセルと南部ワロンのフランス語系住民であり、北部フランドル地方のオランダ語系住民の地位は低かったとされる。しかし、人口面でオランダ語

系住民がフランス語系住民を上回っていたことから、北部フランドル地方の国政における地位は次第に高まり、現在では国政において南北の争いが問題にならないほど優越的な地位を占めている。

エ 米国は、先住民のほか他の地域からの移住者で構成されている一方、黒人と白人を分離しても憲法の平等条項には反しないとの連邦最高裁判決が出されるなどしていたが、この「分離すれども平等」の原則は、20世紀後半に入り、連邦最高裁判決によって否定されることになった。

- ① ア、イ ② ア、ウ ③ ア、エ ④ イ、エ ⑤ ウ、エ

Ⅲ. シンボルに関する次の記述のうち、妥当なものはどれか。(10点)

① ミランダとクレデンダによって支配者は被治者より自発的服従を引き出すが、支配者はクレデンダよりミランダによって護られる方が有効に統治できる。

② ミランダやクレデンダは現代における公民教育の理念に反するものであるから、公民教育の場からできるだけ排除している。

③ ミランダとクレデンダはどちらも権力が尊敬され正当化されるために利用される象徴であり、国家的英雄などの人的象徴をミランダといい、壮大な建造物など物的象徴をクレデンダという。

④ 「王権神授説」は国王の権力の源泉を神に求めるという非合理的な根拠によって被治者の信条に訴えるものであるから、ミランダに分類される。

⑤ 共産主義体制やファシズム体制においては政治的儀式などのミランダによる大衆の熱狂的服従の確保が重視されるが、民主主義体制においてはミランダが用いられることはほとんどない。

Ⅳ. T.ホップズおよびJ.ロックの国家・政府に対する考え方に関する記述のうち、妥当なものはどれか。(10点)

① T.ホップズは、人間の自然状態は不安定なものであるが、基本的には自由で平等であり、その平和な状態をより安定したものとするために、各人は契約により社会や国家を設立すると主張した。

② T.ホップズは、国民の信託により権力を委託された政府が、その信託の目的に反した場合には、国民にはその信託を撤回し、政府に抵抗する権利があるとして、革命権の考え方を初めて主張した。

③ J.ロックは、文明社会によって損なわれた自由と平等を回復するためには、人民主権の考え方にに基づき、新たな契約によって国家を設立し、一般意志を実現する必要があると主張した。

④ J.ロックは、人間は自らの自然権を譲渡し、契約により社会や国家を設立するとともに、政府に各人が絶対的に服従することによって、最悪の状態である自然状態から解放されると主張した。

⑤ J.ロックは、国民の信託によって設立された政府がその権力を濫用することを防止するために、権力の分立の重要性を主張した。

V. 下記の論説を読み、設問に答えなさい。(60点)

省略

(杉田敦、『政治的思考』、岩波書店、185-186頁)

- 設問1. 下線部(a)に関して、モンテビデオ条約に規定される主権国家成立の要件を記せ。(10点)
- 設問2. 下線部(b)に関して、このような議論が説得力をもたないのはなぜか説明せよ。(10点)
- 設問3. 下線部(c)に関して、ここでいう政治の前提とは何か。文中の言葉を用いて説明せよ。(10点)
- 設問4. 下線部(d)に関して、このような状況に立ち到った理由を説明しなさい。(10点)
- 設問5. この論証を再構成し、評価しなさい。(10点×2)

[解答は、解答用紙に設問番号を明記したうえで、記入すること。]